天保十二年

酒祖傳

西垣文庫
文庫10
6628

文庫10
6628

酒祖傳

九重の皇都の水は清く甘き事なれば
天下(アメガシタ)第一とも称すべし　近江の國は稲穀は饒にして湖
をもて安収めて蔵に収め甚甘き有　撰(エラミ)て野洲(ヤス)
栗太(クリタ)高嶋(タカシマ)蒲生(カモフ)の此三郡の酒家に製出せるを
よりて京師に遠からぬの酒は其味の美なることは大海
内外に聞えあるべく殊の外名高き皇都の名に彼(カ)の

酒家の業世挙して造るに何連も其事にまかせて
新しく既に純中酒醸を家々の風儀によりて又其
主人の好ミにしたがひて甘くも辛くも濃くも薄くも
随ふに造り減増すなど相成しが是又無断なれバの
清らにして如何にいふべきとも清濁をも気武ふ毎に
古き詩歌も新しくなる月雪花の風情などにも
酒の猶それぞれ清酒の徳にてよりそれぞれにていふと

興ある事に投じ侍るに往に酒家の実徳例辞をいへる
識者の書を借りて浅きるまの私意を書しるしき
人に志めさんと書記しおくものなりけり一の
の巻には我にならし酒の徳の趣を述てすれども不
及の者学し補ひもあり

一 松尾に清酒造る酒造之祖神を奉る山城
國葛野郡に清酒鎮座在

松尾皇太神宮者

文武天皇の勅命ニ依而大寶元年松尾谷の山
大杉谷より今の御神殿の清地江
清遷座なし給ふ此清神者鳴鏑大山咋(ヲヽヤマクイノミコト)命ニて
弓矢の元神也萬多洪清神ハ酒歌醤油の
守護神と奉崇清する者ハ神代の昔丹波国ハ泥(ド)
海(カイ)ニてありし紀の玉おりしを文字ニも赤(アカ)き波く事かなし然る紀此清神ハ

清神恩あるニ依りて大井川を清くなさせ給ふニて古
更新しき国く成水ハ清く流るる左禮は此水の
清く成るを悦ひ給ひし今古山大杉谷より杉の木ニ物
を移(ウツ)しけて清く之洗の流れを研給ふ山田ニ座る
米麦稗を炊紀食を味ふ紀水を成醸まして蔵(コマロ)ひ尖玉
より卯の刻より酉の刻ニ成るは其紀多く立て
甚饒(カモ)し給ふ多の其紀を辛紀を呂那一国の刻

成就しけるとて酉の水とて名付給ひて諸神に
食し給ひけるとかや　然るに今濃漿をも
用ふるも右三京の名ふハ葛那酉の字を附置るなん
酉の刻に酒の成就しまする　御神徳の無有難く
清らかなる神酒の肴にまゐらせて　松尾諸社年中の
清神事には卯酉の日を専ら用ひ玉ふ事　例年清祭り
三月卯の日に神事なして　四月酉の日に清浄事なる

皆卯の刻より酉の刻に至りて酒の成就しける
清神饌の事よりて清祭りの日を定め給ふとかや　又
松本を植して酒部勝沼を酒る器を成し　松
葉を以酒家の志るしとす事始まる　当社大松谷の古風
残れり　清神饌の世に弘まりしも清るより出て言ふ

一　梅宮之神社を酒造之祖神と奉崇し事ハ文
安文大明神者　延喜式之日山城国葛野郡

酒鎮座在酒神四柱与云々

一　第壹　酒解之神　大山祇尊

一　第貳　大若子之神　瓊々杵尊

一　第三　小若子之神　彦火々出見尊

一　第四　酒解子之神　木花開耶姫命

右四柱之大酒神也天平宝字年中ニ酒ニ鎮座

日本紀神代乃巻ニ曰木花開耶姫ニ柱酒

子生給ふ時ニ以卜定田號ニ狭名田曰以其田

稲醸天甜酒嘗之又用渟浪田稲為飯嘗

之云々　狭名田者能熟したる田を以ニ渟浪田者

能渟ハ地の名也醸するとは酒を造るなり

嘗之云々

天子酒一代ニ一度行ひ給ふ大嘗會ニ酒年

なりト定田者大嘗會行ひ玉ふに先ニ國郡

卜定(ホクヂヤウ)しめて国郡を定められ給ひし其方(ウラカタ)に當し
國郡の内より國郡度名の郷の田に稲子を作らせ給ふ
老清津に作る事ハ國ハ近江丹波の両國に限る
なりと其田の稲子を以酒を造りて清飯に用ひ
給ふを悠紀(ユキ)主基(スキ)の二殿といふなり
天子自ら天津神國津神を祭りもて奉給ふ
是神代乃吉古例也

大山祇尊 木花開耶姫二神 古禮(コレ)神代より
酒を造りこしめし給ひしハ梅宮ハ酒造祖神と奉
申也是又延喜式ニ大山祇尊
木花開耶姫を酒解子神酒解神とあがめ
則酒解ハ清神酒を製し給ふ故にかく
酒造祖神と數ひ奉る事なし

一 延喜式神名帳ニ曰造酒(ミキ)司(ワカサ)坐(イコス)神(カミ)六座 大四座 小二座

大宮賣神社四座 並大月次新嘗

酒殿神二座 並小

酒弥豆男神　酒弥豆女神

いにしへ大内裏の造酒司是を用ひさせ給ふ造酒正を
造酒司めして造らしめ給ふやなりさて其外に酒神
と祭らせ給ふ則其六座の酒神是なり 前の四座の中一座是
大宮賣神やあとこえは 酒の守護神として大宮賣神
伝へ来りして神名未詳

を祭らせ給ふはいかんとなれは此神の御神徳を貸合
給ひしゆゑなりいにしへ天照太神天の岩戸に
入給ひし時諸神岩戸の前に集りまして神楽を
奏しけれは天照太神岩戸をおしひらき出給ひて
より大宮賣神諸神の仲をとりもち善言美詞をもつて
諸神を和らげ給ひしなり此神の御神徳なる
故大殿祭の詞文を拾芥抄執政所抄なとに

宮咩祭文等に委しくみへたり故に此酒神ハ君臣
父子夫婦兄弟をはしめ人をむつましく和らく
人和をなさしめ給ふ此酒神の徳を和らけまします
酒といふハ日本紀の一書にも事和薬咲薬と
いへるか如し是を呑ハ身の氣血を能めくらし心の
憂を払ひ欝氣を散したのしみて楽しくなる
事なれは古よりも此事をもて朝廷にも相宴
まても人の會合にハ必すこれを用ひて宴楽をなさしむる事とハ
うち親しみ人々たちまち睦しく親しく人和なさしむる事
此酒神の御徳功と尊み奉るへき也造酒司にも此
御神を祭らせ給ひしハ採酒殿にて祭る神二座にて
酒造に仕奉る酒造の官人の祖神を祭り奉る故なりし
一神祇官ハ神殿の中第六の御殿に酒の神を
大嘗會神事に用ひ奉り毎年十一月中ノ卯日新嘗

祭の前夜にあたりて鎮魂祭と云ふ神事ありて神代

の古き旧例として酒瓶を始めて鐵鐸(サナギ)の矛(ホコ)を以て

をも律させ給ふと承りて天子御祈祷の大法神変に

酒造の名実を用ひさせ給ふ事神代よりこ

ありて今なお是も事に絶えさる是又酒の徳の

大なる事にあらすや酒業の人豈信せさらめや

一 素戔嗚尊を酒造の祖神と奉崇事

神代の巻に曰 素戔嗚尊大蛇を退治し玉ひし時

醸(カモス)醞(ヤシホリノ)酒(サケ)を以て玉ふと有 此酒は米穀の魔不祥を払へとこそ酒

を醸し玉ふ紫霧なる魔し 此酒を大蛇を砕

し先給ふ酒なりと有 先造り始め給ひし故に酒造

の祖神とも申すなり

一 大和国三輪の神を酒造の祖神と奉崇御事

大国主命(オホクニヌシノミコト)大己貴命の別名也 三輪山において始て酒を醸し給ひて

一 酒を饗し給ふ事 三宝荒神又清諸ともに又祝言之事にて 酒の三稀とも和合の九重に見へたり

又誠酒の三稀味酒の三稀とも古事に見へたり

一 少彦名命は酒の神とつたへたり 古事記に曰

神功皇后酒を醸しゑひ 御子応神天皇に献じて

歌曰 許能美岐波。和賀美岐那良受。久志

能加美。登許余迩伊麻須 伊波多多須。須久那美迦微

能。加牟菩岐。本岐玖琉本斯。登余本岐。本岐

母登本斯。麻都理許斯。美岐叙。阿佐受

袁勢佐佐

此御歌の心は此神酒は我酒にあらす酒の

神とこしへ常世の国にまします少彦名神の神寿

寿きくるほし奉りこし神酒なれはあまさす

[illegible] 飲めへと有しと説しても酒の事を祝ひたまふ

一 五条通 [illegible] 西洞院にて又伊勢天神宮といふ也 社

此處名神と号る社有り則日本醫祖神として
祥して毎年五月十日に酒祝祭り有（此日神に酒を獻して或は哥を奏す之配る例之）
抑此處名神は醫道の祖神にましまして萬民のた
めに醫道を始め藥を製し是を名付て百藥といへるは酒を
以て基元とす今の世まで酒を百藥の長といひて
尚ふも此故なりされは神功皇后の酒をば此の神の造り
給ふ物にて清水よみ給ひしも酒を藥の類にして是を
呑ば心の憂を忘れ身も健にして寿を延るなれば
祝して清き應神天皇にも是を嘉して御ひかりあり尤徒に
是は酒を呑む人のいとくみいふらするにて其人の量に
過して飲まば呑たる故に長寿の藥となりけるに今の
世の人もし上代よりのかひなく強飲せらして尤のま
くいらてい長寿ならさる人そや
一　御所にて是を酒は中有丈加て造酒と蔵人

遊酒ハ旅歩ノ中出家有此出家ハ酒ヲ大嘗會ニ祈
嘗會ニ酒ヲ造りて奉也尤黒白とて清酒ニ酒
なり又伊勢ニ天照皇太神宮ニも黒白ニ酒を備ふなり
一 昔ハ町家のもの酒呑ミ稀なりしが今の世ハ下戸
ハきものも上戸能も呑み候而何ぞ難有時代なりけるぞ
一 故ニ酒呑ミのを上戸と云ふ不呑ものを下戸と云ふ
其昔漢の帝高楼を建其上ニ焼酒おける鳥毒を
彼高楼ニ来りて番兵様とかいて帝へ是を上
ならて酒呑ミもの氣ニ入てしてくて上の門を守酒
呑ミするものを下の門を守る此故ニ酒呑ミものを上戸
と云ふ不呑ものを下戸と云ふ門の事もて戸と云ふ文
字を取ても戸と云ふて書て門と
読しなり中興ハ日月と云ふ字を取て書く門ハ読む門也
日のおもハ明るく暮ニ戸を守る也なり又明ハ日月と云ふ字を取て
書なり是ハ日月入ての日ハお明也
一 四方ニ酒造り始てく薬師にて大和屋何某山崎屋

倭朝にては酒造を神楽して天地をまつり酒を造り
始りまつりし也て弘法のたまはく併水をもて清むる
水すまさるは難波の家まもり橘の餝（ニカマ）戸の里をいふとかく
水清し 錢ゟのりとも清水を よそかた地のなり 出来て天地の初よりはあること
酒を造始む醂（ウマ）酒を醸して萬價の樽に有是銘
またし酒造は始けり夫今大和の国にて専ら造り侍るは
夜雅のの姿しかるを古き地にして醸して是は数の泉

併酒も原師は多くにみえたり

一酒造は男子長たるものを杜氏（トウジ）と号す蒙求（モウキウ）に曰
唐土周の時よりも有りし杜康（トウコウ）といふ人酒造る事を始め
妙なる故に又酒造る者を杜康氏といふ氏を似
杜氏と号けり

儀（キ）狄（テキ）造酒　夏ノ禹王ノ臣

魏（ギ）武（ブ）帝（テイ）短（タン）歌（カ）行（コウ）に曰（ノワク）

慨当以慷憂思難忘何以解憂

唯有杜康

注謂杜康若古之酒造者名也

見于世家求

亦一説に杜康と云もの書り是遠て杜康とも云へし

一酒とそことへ云るまゝ異名の清らなる物とも名の佐

佐々のの人よ詩詞より酒の名とそおかまで有るらん

さゝのとし強る言葉なり酒を強て以禮とする故あり

りとし是を志とあひそよろしのものなるもや又古書ふ

酒宴を柏上とよ申したり是は拍上といふよしなり

凡酒宴の折で手打て祝し又入ると記す手拍子を

とれ是を以て酒宴を字なるとも云是をいふ古

記言葉なりされハ酒宴を字なるといふ酒とさとく

ふ等とし日本紀神代より乃古き言葉なりかし

一又一説ニ酒を無といふ事ハ昔かし雀來りて竹の切株
に水溜りける所に脩を入置て麹を入置し（麹ニ芳気ありて雀に来て有しに雀の入たる也）
（麹ハ稲中に自然と出来る稲麹なり）日毎ニ來りて撹廻せし其雀此水を
呑に酒と成る他の雀に異なりし故此水を能く
飲ける度に其味醞ニ美なり見る人へ彼雀の仕
法をならひて酒を醸ねりて有りし竹の株を以ての心
土汲無といへり雀乃酒を醸しける謂也とかや

酒の字書に酒と讀なり亦説に酒といふ
文字ハ數字其字を變し文字に用ふる也 刻
酢醤油抔も皆此酉の字を加ふ酒十二支の
内酉の刻ハ白日暮して黒夜と成る故に此酉の
文字を用る醸雀の作りし一ツより酒といふ
字用ゐる事も有物

一 泉州酒造株之儀ハ最寛延年中酒造家

御調有之明暦三ヶ酉年より六拾年以前ゟ酒造
仕来り候者ハ拾年以後ゟ酒造被仰付候者
御礼拾ニ拾年以来之者酒造相止ハ拾年以前之者ニ
酒造株ニ而今ニ至る京地酒造株是也
天保十三寅年より凡百八拾四年ニ成其節御触書
牧野佐渡守様 御奉行 丸山備前守様 是京都の御奉行所也
一 諸酒株之儀ハ右之訳ニ而酒造相止候者清酒渡世
仕其外よて商売人ゟ相成兎角ニ而取締りニ付

享保十九卯年造酒仲間ゟ清酒株ニ而御願上造
酒仲間江被為御免被下置候清酒株是也
清酒株ハ従京有年清酒株ハ在之株也百株ニ付割ニ百株ゟ
是ハ右年号之時代也拝領株又ハ家筋株ニ而 御政清酒之株有 此株ハ
休造酒株ニ付 江戸表ゟ御触流ニ有之 冥加ニ御礼上ル 御冥加
銀御免ニ被下 清酒株ニ付 御得御引清酒清酒ニ而 又板看板請
酒之儀ハ有 是ハ要株也 宝暦年中ゟ十三年分 貳升ヲ清酒商売
御免也 皆夫ニ尋 請候之儀 且右株之者ハ人別ニ 此酒屋株請
酒屋株并清酒冥加祖之訳柄株高新規ニ酒屋仲間より書上ゲ
御奉行様 御弘メ被成候ニ 酒屋仲間書上候御 聞書之写し
書付ヲ酒屋仲間之是ヲ要ニ付候 清酒株当年凡百六十年ニ相成

一清酒ハ古ハ稀ニ作る故万治年中ニ酒磤（すかつけ）初て出来ける迄清
國酒集傳ニ見へたり 然て田舎にてハ清酒ハ払底なし
濁酒（ダクシユ・ニゴリザケ）斗のミ多し しかして京地にてハ住吉のミ清酒有と
見へたり 既ニ大嘗會新嘗會ニも神代昔ハ酒磤
を用ひ給ひし 黒白の二酒有るをもつて 又大和國三輪
山ニハ大國主命酒を釀し玉ひし時 酒磤（イニツ子）にて酒を絞り
給ふとあるを以て 東山殿ハ酒を奉献ニハ清酒とある

延禮田舎にてハ万治年中迄ハ飯籬を以ておしたりと見
へたり 京地にてハ住吉より酒磤有りて絞りしなるへし
一住吉ハ酒造ニも麦麹を用ひたると見へたり 造り種ハ
くまを造り 黒米にて糀となる 又白米ニて糀を用ゆるハ
造りしまきより 今之麹屋の看板之白糀と書たり 黒米ニ奴糀と
白米の糀なるへしといふなり
諸国ニ糀ハ白米ニ住造来り 白米のみを諸国ニ用ひ付て上酒
と世にも出て何れも皆清白米にて造りて僻今にて

もみよりて洗穢して米を洗ふ手まして茶色とめて
さる事を可用事八分し

一酒仕込方之法ハ常之一瓶二瓶として瓶まで極め
なり天明年中の黒米稽古を以酒を造らすといへども
仕舞といふ 絶白米拾弐石八斗 水…… 酒何 ……

一酒造ハ其家々の風流又ハ杜氏の心くばりにて仕込
方違ふて……壁は人面のごとし

一人酒を呑て色赤く成者あり又青く成ものあり其所
種々の性あり夫酒ハ五味を保ち五臓へ分ち納り中
分て心臓に納る性ハ其色赤し心の臓ハ火也酒ハ
湯水也火討水をもる故色赤く成ものハ大酒
をするもの也肝の臓に納る人ハ其色青し肝ハ木
也水生木と相生なる故に色青く成ものハ大酒すれ
ば……のごとし鏡着眼なかりして其ハ形を写す……之

神前に建る　廣は魚に白鏡は天の鏡命傳数を在して鏡と作り　好むふる月数とは清新の事なり雲の上と云也

酒者清浄にして能其気を助寿保之神を使ふ故悪

常之憂の気有ものは酒にかゝりて愁ふ償さて平生

心足事を知るものは酒之其儀嬉を助る　俗に酒は上戸と云　楼嬉者と云　鮮は

其升愁楽心の清濁（セイダク）に清浄は酒のよろこび識之施し

きる事は有る人に能久く積給ふ事也其性之徳

一く能種ふ養性除憂を増楽長寿其外酒

の数を挙（アゲテ）て難敉（カタシカリ）と云々　完賢人々

干時天保十一庚子年

千早振神代より酒といふものは造り始

給ひたる人の在りし傳へしもの國史に始めて見ゆ

し給ひたるの古書とりてみへたるを知るは古の書とり

古一口の巻とかり酒祖傳と名付て傳しめ置ぬ

し酒進る歌にいへるハ楽しみを好みて曰く
いにしへ人ハ今人にたちて此酒肥の恩頼(ミタマノフユ)を去らぬ
其基源(ツイジ)の正しき紀を学ふに見て其経を書りあかしハかの
故ある神寿(カムホキ)豊寿(トヨホキ)をおほしかしこく瘴(ヤマイ)をも
剣憂をも除那人常磐堅磐(トキハカキハ)にとかへまちなを
人かしこくハいとど益度ある思ひ侍めり

まそのしらかまく
うきさすとも是かはしか
酒てふ有かな
んしともかむ

天照も神のみことを萬人の蒙りて請得たらん
実晴る嵐雲の靄きて知られけし神の知り
しも後人の知清く見れなまして紅を梅して常まれらん

早稲田大学図書館
011488466412